

● 第11回国際オーボエ コンクール・軽井沢

松 本 學

2015年10月、「第11回国際オーボエコンクール・軽井沢」が行われた（3～12日）。ソニー音楽財団の主催で3年に1度開催されるこのコンクールがスタートしたのは1985年。したがって、第10回を数えた前回2012年に続き、今回は30周年となる。

審査結果から先に触れると、この記念すべき回は、30年というその短くない道のりの中で画期的な結果となった。というのは、当コンクール史上初めてアジア勢、それも日本人が第1位に輝いたためである。これまでにアジア勢が最高位となったのは、第1回に第2位（1位なし）となった辻功（現・読響首席）と、前回2012年第2位の金子亜未（前・札幌首席、2016年から新日本フィル首席）の2名のみである。優れた音楽家を輩出すべき「国際」コンクールであるゆえ、国籍などにこだわる必要はないが、当コンクールのミッションのひとつに“日本人演奏家のレベルの向上”も挙げられていることから、これは素直に喜ばしいことである。

今回その栄冠に輝いたのは、東京藝術大学4年（2016年春からは大学院に進学）で、この年の6月から東京交響楽団の首席研究員も務めている荒木奏美。テクニック、音色、和声感とどれももちろん優れているが、同時に、例えば小さなミスが起ころうともそれにあまり拘泥せず、常にその場を楽しみながら生き生きと演奏を進める姿勢が彼女の才能のひとつだと感じた。

なお、ファイナルでモーツァルトの協奏曲の伴奏を務めた群馬交響楽団には、1991年の第3回コンクールで第3位に入賞した小宮山美香氏が団員として参加していた。初の日本人女性最高位受賞者が、初の第1位となった日本人女性受賞者を伴奏で支えていたのが印象に残る。

以下、今回のコンクールの特徴を記しておく。

応募人数は、過去最高となる33か国計197名（前は27か国、160名）。その中には、2度目、3度目のチャレンジとなる常連もおり（第1位受賞者以外は再挑戦可能）、既に欧州の有名なシンフォニー・オーケストラや歌劇場のオーケストラの首席ポストを得た者もみられるのは例年通り。今回は、特に日本人コンテストの予選通過者が多かった。

審査委員は委員長のハンスイェルク・シェレンベルガーをはじめ、モリス・ブルグ、ゴードン・ハント、小畑善昭、古部賢一（以上オーボエ）、吉田将（ファゴット）らレギュラー陣に、長らく続いたクラリネットだけでなくオーボエのアラン・フォーゲル（ロサンゼルス室内管弦楽団）が加わっての体制がとられた。

課題曲では、30周年を記念して当コンクール初となる新作委嘱が試みられた。《スベル・ソング～呪文のうた》と題された細川俊夫氏による7分ほどの新曲は、第2ラウンドでの必須課題とされた。その他では、課題曲のひとつであるマルチヌーの協奏曲が暗譜を義務付けられたことも、今回初めてである。

審査方法は例年通り、4月に録音での予備審査が行われ、10月に第1次予選、第2次予選（セミファイナル）、本選（ファ

イナル）と進む4段階ラウンド方式。課題曲は、本選に出場する場合、計9曲が課されることになる。予選終了ごとに行われる非予選通過者たちへの審査員クリニックは、当コンクールの特に優れた点のひとつだ。

1次予選37名、2次予選18名で競われた末に、本選に進んだのは5名（本稿の最後の結果一覧を参照）。シュマルル、ペリーヌの技巧と音色、フレージング、ジュラヴリョフの余裕のテクニックと楽曲理解、副島の端正さなどが印象に残る。また、本選で群響の指揮を担当した大井剛史氏が、各コンテストたちの音楽に丁寧に寄り添って、彼らの音楽を自然に引き出し、より濃密なものにしていた功績は特に付記しておきたい。

審査基準についてもひと言触れておこう。フィンガリングや発音などの技術がより高いことが求められるのは当然ではあるが、審査員たちによれば、当コンクールはテクニックの品評会ではなく、飛び抜けた音楽性を持っている者を見出すことを主眼としているという。したがって、その音楽性を磨き、表現することにこそ重点を置いて臨む姿勢が求められている。

運営面

●**環境**：ラウンドを重ねるごとにぐんぐんレベルが高まっていく熾烈なレースとなったが、いっぽうで各コンテスト同士は今回特に和気満々として、コンクールの日々を楽しんでいる様子がかがえた。これは彼らがもともと知人・友人が多いこともあるが、第1次予選前にレセプションを開いたり、宿泊環境、練習時間・場所のケアに腐心した事務局サイドの配慮によるところも大きい。

●**広報**：前回に引き続き、軽井沢の駅をはじめ町の各所にポスターなどを掲示。FM軽井沢側からの協力もあり、特にファイナルでは充実した集客を得た。今後もラジオやTVへは運営サイドからより積極的に働きかけるべきだと思う。Ustreamでの生中継及びオンデマンド放送は今回も活用され、第2次予選終了後に行われた細川氏の自作解題レクチャーはとて貴重企画であった。

●**その他**：前回の公式ガイドブックに倣い、コンテスト・伴奏者ら出演者全員のプロフィールや課題曲の曲目解説を1冊にした公式プログラムを製作販売していたことも新たな試みである。

●**入賞者・審査員コンサート**：従来、本選翌日に軽井沢大賀ホールで行われていた入賞者と審査員によるガラコンサートを東京でも開催し、プログラムの異なる2日公演としたことも第11回の新たな試みであった。東京でのコンサートがほぼ満席の盛況ぶりだったのは、当コンクールが広く浸透してきていること、そしてオーボエの人気のいや増していることの証と言ってよいだろう。

…第11回結果（在籍先はコンクール時のもの）…

第1位 & 大賞賞：荒木奏美（東京交響楽団首席／東京藝術大学在学中）

第2位：ユーリ・シュマルル（ハノーファー州立歌劇場管弦楽団＝ハノーファー・ニーダーザクセン州立管弦楽団首席）

第3位：フィリベール・ペリーヌ（パリ・オペラ座管弦楽団首席）

入賞：ミハイル・ジュラヴリョフ（バンベルク交響楽団契約団員）

副島理沙（リユーベック音楽大学在学中）

委嘱作品最優秀演奏賞（細川俊夫賞）：フィリベール・ペリーヌ
聴衆賞：荒木奏美

奨励賞：副島理沙